

総括

東洋大学経済学部教授 安田 武彦 氏

東洋大学経済学部の安田と申します。村上氏、井上氏、藤田氏の報告について、簡単に総括をさせていただきます。

本日は、非常に有意義な報告を3本聞かせていただき、感謝いたします。私からは、今後、創業企業の課題をどのように拡張していくのかについてお話いたします。

先ほどの報告は、1つ目が開業前の課題、2つ目が開業前後における販路の課題、3つ目が開業後の課題で、これらは、業績によって異なるという報告でした（スライド2）。

まず開業について、色々な研究が1990年代あたりから行われています（スライド3）。主に、起業予備軍や起業家についての研究です。学術的にどのような人が起業家になるか、どのような人が起業家の予備軍になるか、などが主として研究されてきました。性別や年齢、小学校のときの成績、かなりイレギュラーですが麻薬取引の経験があるなどの属性と、起業や起業志望との関係を掘り下げています。

ただ、実は近年、こうした研究はやや下火という現状があります。これはなぜか。「男性は開業しやすい」に対し、「だからなんだっていうの?」というようになってしまったためです。そのような中で、本日の3つの研究をみてみますと、まず村上氏の研究に関して、どのようなところが新しいかということ、「開業費用その他」「計画的準備」と開業との関係を分析している点です（スライド4）。これらは、

先ほどの性別や年齢などに比べ、「だからどうした」となってしまう項目ではなく、操作可能変数であり、「こういうことに気をつけたらいい」という、起業してから少しでも成功できるような示唆をもたらす研究を行っていることが特徴です。

また、井上氏の研究は、販路開拓に関して、開業前、開業後に分けて研究していることが、非常に興味深いと感じています。

3つめの藤田氏の研究は、新規開業企業のパネルデータを用いていることです（スライド5）。これは総合研究所の1つの成果であり、このデータを使用し、開業後の課題の推移をみていくという点が非常に斬新でした。

では、今後の検討課題はというと（スライド6）、まず、村上氏の研究で非常に興味深いと感じたことは、「100万円以下の資金で開業した企業が少なくない」ということです。そのうち、2割以上が、資金不足に陥っています。それにも関わらず、借入れは行っていません。これはどういうことでしょうか。資金不足のまま開業する企業が存在するという点で、実際に、資金調達の満足度と業績の関係をみると、あまり適切ではない形での開業といえます。

日本政策金融公庫は小規模企業を非常に重視し、融資などを行っており、守備範囲であるということ打ち出しています（スライド7）。ところが、今日のインターネット調査では、それよりも小さな企業がかなりあり、さまざまな問題を抱えているよう



に感じられます。例えば、フリーランスなど、あらゆる形態のものです。

こちらの図は、今年初めて出版した「小規模企業白書」からの引用ですが、開業した企業は「専門・技術サービス業」「情報通信業」などが多くみられます（スライド8）。もっと細かく職種でみていくと、「建築設計」「投資」などさまざまです（スライド9）。

実は、我が家では家庭教師をお願いしています。彼は、普段は非常勤講師として大学で教えていますが、息子には物理やプログラミングなどを教えてもらっています。では、彼の本業はなにか。大学非常勤講師も家庭教師も、本業ではないようです。実は、UFO 研究者としても有名なのですが、こうした業種や職業はどこに分類されるのだろう、という印象です。

その他にも、主業と副業をもち、かつ、副業を多く行っている人もいます（スライド10）。こうした人たちに対し、もし資金が不足しているなど問題があれば、どのような方法で解決していくかが課題になっていくと思います。

次に、「幼児期」の起業家を受け入れる社会経済システムをみてみます（スライド11）。これについては、販路開拓で井上氏からお話がありましたが、販路開拓を行う新規企業を社会がどのように受け入れていくのかという視点があります。実際に、多く

の起業家が感じているのは「うさん臭くみられてしまう」という点です。例えば、大手企業で営業部門トップだった人が開業した途端、「〇〇株式会社と付き合いをしていましたが、あなたは今違いますよね」といわれてしまう、などということがあります。こうした風潮をどう考えていくのか。現実をみていくと、日本の起業家への評価は非常に低いことがわかります。

例として、GEM という世界的な起業家調査があります。そのなかで、「あなたの国の多くの人たちは、新しいビジネスを始めることが望ましい職業の選択だと考えていますか」と質問し、起業に非常に関係が近い人、あまり関係ない人と分けて、ズラリと国を並べました。日本はどこに位置するかというと、実は、起業に関係ない人が非常に多いところなのです。しかも、起業と無関係の人で、会ったこともなければ、自分に技能がないと思っている人ほど、起業に対して非常に冷たい（スライド12）。現に、フリーランスの意識をみていくと、日本における「社会的評価」や、先ほどの藤田氏の研究報告であった「収入」などについては、決して満足していないことがわかります（スライド13）。「やりがい」「裁量の高さ」などに関しては満足していますので、この2つの点が問題になっているという印象です。起業家やフリーランスを受け入れる側をどのようにしていくか、どのように考えていくかが、これからの課題だと感じています。

最後に、1つの例をあげて、総括を終わらせていただきます。

旧ハプスブルク家の都、ウィーンがなぜ音楽の都になったのか。ベートーベンやモーツァルトなど、たまたま天才が次から次へと輩出されたのか。また、パリでは19世紀、モネやマネ、ドラクロワなど、偉人が輩出されました。たまたまその時期、なにか異変が起こり、天才がたくさん出てきたのか。これは違うと考えています。つまり、社会が、こうした

天才たちを受け入れる風潮やネットワークなど、さまざまな仕組みが存在して、初めて音楽の都や芸術の都が誕生したということです。

こうした点を踏まえ、日本では今後、どのように社会をつくっていくのか、という課題を考えていかなければいけません。

以上で、私の全体的な総括とコメントを終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

